

ジュニア

友達から悩みを打ち明けられたときの対処法などについて伝えるスクールカウンセラーの今村咲枝さん＝名古屋市千種区で



今週のテーマ
**スクール
 カウンセラー**

**知る
 コレ!**

**小さな変化
 アンテナ張る**

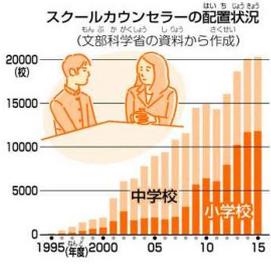
友達と仲良くできなかつたり、将来のことに悩んだりしてストレスがたまったり、みんなはどうしていますか？音楽を聴く、スポーツをする、布団をかぶって叫ぶ…。きっと自分なりの解消法があると思いますが、「誰かに話を聞いてもらうと、心がスッと楽になるかもしれません」。

名古屋市千種区の振甫中学校の授業で、そう話したのは臨床心理士の今村咲枝さん。この学校に常駐している「スクールカウンセラー」です。

ただ相談に来る人待た

友達関係がうまくいかなかったり、いじめに遭ったりして学校に行くのがつらいとき、周りに悩みを話せる人はいますか？親でも先生でもない立場で相談に乗ってくれるのが「スクールカウンセラー」と呼ばれる心の専門家。学校生活をサポートしようと、急ピッチで配置が進められています。

(川合道子)



悩み聞く「心の専門家」

**常勤化には
 人の確保大変**

国によると、スクールカウンセラーを学校に置く事業は一九九五年度にスタートし、二十一年間で約二万の小学校に広がりました。グラフでも一人が複数の学校などを掛け持ちしている場合が多く、学校によっては月に数回しか来ていないのが現状です。

そこで進めようとしているのが、毎日学校にいる常勤のカウンセラーを増やすことです。名古屋市では三年前、全国に先駆けて心や福祉の専門家をつくる「なごや子ども応援委員会」を発足させ、カウンセラーの常勤化を始めました。

きっかけは生徒がいじめを苦に自ら命を絶つたことでした。子どもたちの人間関係は日々刻々と変わり、いじめや不登校の背景に家庭の貧困や虐待といった問題が隠れていることも。市の担当者は「先生に加えて子どもにとって身近な存在になろうと小学校で実習に励む愛知教育大の学生たち」愛知県豊明市で



ただではありません。毎朝のように校門に立って登校してくる生徒たちに声を掛けたり、先生と情報交換をしたりして、日常の小さな変化を見逃さないようにアンテナを張っています。

記者が取材で訪ねた日は、二年生の教室で授業をしていました。生徒たちに伝授していたのは「きょうしつ」という合言葉です。「気づく、寄り添う、受け止める、信頼できる大人に、つなげよう」の頭文字を並べたもの。友達から困りごとを打ち明けられたときに気を付けるポイントが少なくありません。

「困った人が気軽に話せるようにすることが大事」と話します。

専門家の力が必要になっていく」と話します。

一年後には現在の中学五十八校から全中学百十校に広げる計画。国も、このような先生以外の専門の職員を配置して学校全体をサポートする仕組み「チーム学校」を進めています。

大変なのが、カウンセラーになる人の確保です。担い手の多くは臨床心理士という資格を持っている人ですが、日本臨床心理士会（東京都）によると、最近では病院や企業などからも必要とされる人が多く、人手不足といえます。

学校現場を支える専門家を育てようと、名古屋市立大や愛知教育大（愛知県刈谷市）では、今年から新しいコースやカリキュラムを整えるなど取り組みが活発化。県内の小学校では愛知教育大の学生たちが「子どもに寄り添い、笑顔を守る」ことができるようなカウンセラーになりたい」と実習に励んでいました。